文学にみる自然と人間 ―『方丈記』、『源氏物語』から―

植田　恭代

はじめに

日本中を震撼させた昨年三月十一日の東日本大震災は、私どもに日々の暮らしの見直しを迫り、生きることの意味を問いかけてきた。この度の特集「自然と文明」も、その流れのなかで企画されている。

震災直後からの報道で今回の地震・津波と類似する過去の例として引き合いに出された貞観地震は、延喜元年（九〇一）に成立した『三代実録』貞観十一年（八六九）五月二十六日の記述による。「陸奥国、地大（おほい）に震（ふ）動りて」と始まり、大地震と津波による被害と混乱を伝える記述は、繰り返し流されるテレビの映像そのものを語るかのようであった。[1] 清和天皇の時代の地震が、千年以上の歳月をこえて、眼前の現実とぴたりと重なる。その驚きと衝撃は、書き記されたことばの威力を改めて思い起こさせた。顧みれば、現代には、『三代実録』のみならず古代からのさまざまな文献が受け継がれている。それらの資料は、現代の私ども同様に人々の生きていた時代の所産としてある。身近に知る書き手であれ、まみえぬ遠い過去の書き手であれ、先人たちの真摯な記述は、生きたことばとしてさまざまなかたちでそれぞれの時代の様相を伝えてくれる。そこには、同時代のできごととして自然災害も記される。さらに視野を広げて考えれば、文学作品は事実の記録とは性格が異なり創作性が強いが、それゆえ人の心が表されている。自然災害を直接対象とする作品がある一方で、事実としてとりあげなくても自然と人を問うてくる作品もある。いずれも、現代を映し出す手鏡のよう

に読み手に一考を促すものである。

現代文明のなかで、過去に書き記された文献はともすると「古典」として退けられがちであるけれども、それらの文化財産に真摯に向き合うことは、先人たちのあゆみを知り、その心にふれることである。そこから導かれてくる自然と人間のあり方を知ることでもある。それは、現代を生きるうえでの叡智を得ることにほかならない。

いま、本稿では、日本の文化に育まれ日本の古典文学を専攻する論者の立場から自然と人間を考える一助を得るために、『方丈記』と『源氏物語』にふれて考察を試みることにしたい。

一、記録と文学―地震から―

日本の古典文学のなかで大地震が描かれた作品としてまず思い浮かぶのは、鴨長明の『方丈記』である。「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。」という有名な出だしで無常観を表すこの作品は、火事・辻風・急な遷都・飢饉等の災害に見舞われた人々の状況を書き記し、続いて大地震に言及する。

また同じころかとよ、おびたたしく大地震ふること侍りき。そのさま世の常ならず、山は崩れて河を埋み、海は傾きて陸地をひたせり。土裂けて水涌き出で、巌割れて谷にまろび入る。なぎさ漕ぐ船は波にただよひ、道行く馬は足の立ち処を惑わす。都のほとりには、在々所々堂舎塔廟ひとつとして全からず、或は崩れ或は倒れぬ。塵灰たちのぼりて、盛りなる煙のごとし。地の動き、家の破るる音、雷に異ならず。家の内にをれば忽ちにひしげなんとす。走り出づれば、地割れ裂く。羽なければ、空をも飛ぶべからず。竜ならばや雲にも乗らむ。恐れのなかに恐るべかりけるはただ地震なりけりとこそ覚え侍りしか。かくおびたたしくふることは、しばしにて止みにしかども、その名残しばしは絶えず、世の常驚くほどの地震、二三十度ふらぬ日はなし。十日廿日過ぎにしかば、やうやう間遠になりて、或は四五度、二三度、もしは一日まぜ、二三日に一度など、おほかたその名残三月ばかりや侍りけむ。[2]

これは、元暦二年（一一八五）七月九日の地震である。掲出

部分直前に養和（一一八一～一一八二）の頃かとして飢饉の記述があり、「また同じころかとよ」と始まるこの大地震は、実際には飢饉の三年後にあたる。長明の誕生は仁平三年（一一五三）もしくは久寿二年（一一五五）とされ、この時は三十歳ほどかと推定される。山は崩れて川を埋め、海が傾いて陸地を浸したという記述は、津波の怖ろしさをありありと伝えている。京都近辺でも寺の堂塔がみな倒壊し、塵灰の立ち上る様子、家の壊れる音などが具に記され、家の中にいればつぶされそうで外に走り出れば地割れがし、空をも飛べず竜のように雲にも乗れない人間の無力さゆえ、「恐れのなかに恐るべかりけるはただ地震なりけりとこそ覚え侍りしか」という。頻繁な余震が次第に間遠になり、余震は三ヶ月ほどであったかとする。

この地震は、九条兼実の漢文日記『玉葉』にも記されている。

午の刻、大地震。古来大地の動く事ありと雖も、未だ人家を損亡する例を聞かず。仍つて暫く騒がざる間、舎屋忽に壊れ崩れんとす。……略……伝へ聞くが如くば、京中の人家、多く以て顛倒す。又白川辺の御願寺、或は顛倒の所あり。或は築ばかり破壊す。法勝寺の九重の塔、心柱倒れずと雖も、瓦已下皆震ひ剥ぎ、成す無きが如しと云々。

『玉葉』元暦二年七月九日条[3]

午の刻とあるから、昼の地震とわかる。家屋が倒壊し、白川辺の寺や法勝寺九重塔の被害が記され、『方丈記』の「在々所々堂舎塔廟ひとつとして全からず、或は崩れ或は倒れぬ。」と重なる。また『百練抄』の同日条にも「午時大地震。其声如レ雷。」[4]とあり、「法勝寺阿弥陀堂顛倒。九重塔破損。」の記述は『玉葉』と見合う。『玉葉』の続く記述には、この地震による混乱と動揺の様子が続き、兼実のとらえた衝撃の大きさがうかがえる。一方、『方丈記』の大地震の記述は次のように結ばれている。

四大種のなかに、水火風は常に害をなせど、大地にいたりては、異なる変をなさず。昔、斉衡のころとか、大地震ふりて、東大寺の仏の御首落ちなど、いみじき事ども侍りけれど、なほこのたびにはしかずとぞ。すなはち人みなあぢきなき事を述べて、いささか心の濁りもうすらぐと見えしかど、月日かさなり、年経にし後は、ことばにかけて言ひ

出づる人だになし。

「四大種」は、すべての根本をなす地、水、火、風のこと、そのうち水、火、風は災害をもたらすが、大地だけは動じないと思っていたのに、という。引き合いに出されている「斉衡」の例とは、文徳天皇の斉衡二年（八五五）の地震で、『文徳実録』斉衡二年五月二十三日条に、東大寺から廬舎那大仏の頭が落ちたと奏言があったという記述が確認できる。その前の四月や翌月以降の記述にも「地震」の記述が散見しており、これは相当な大地震であったと推測されるが、それとて元暦の地震には及ばないと長明が記すほど、この時の地震の被害が甚大であったということであろう。そして、掲出部分最後の一文には、時間が経過して記憶が遠ざかることに言及する。『方丈記』の大地震描写は、歳月とともに自然へのおそれが風化することへの警鐘としてある。無常というこの作品に通底するとらえ方と見合い、自然現象と人のあり方を鋭くみつめている。

同じ地震は、『平家物語』にも描かれている。これは『方丈記』の叙述に似ており、特に『平家物語』の延慶本本文は似ていることが指摘される。

平家みなほろびはてて、西国もしづまりぬ。国は国司にしたがひ、庄は領家のままなり。上下安堵しておぼえし程に、同七月九日の午刻ばかりに、大地おびたたしくうごいて良久し。赤県のうち、白河のほとり、六勝寺皆やぶれくづる。九重の塔もうへ六十ふりおとす。得長寿院も三十三間の御堂を、十七間まで振り倒す。皇居をはじめて、人々の家々、すべて在々所々の神社仏閣、あやしの民屋、さながらやぶれくづる。くづるる音はいかづちのごとく、あがる塵は煙のごとし。天暗うして日の光も見えず。老少共に魂を消し、朝衆悉く心をつくす。又遠国近国もかくのごとし。大地さけて水わきいで、盤石われて谷へまろぶ。山くづれて河をうづみ、海ただよひて浜をひたす。汀こぐ船は波にゆられ、陸ゆく駒は足のたてどをうしなへり。洪水みなぎり来らば、丘にのぼッてもなどかたすからざらむ。猛火もえ来らば、河をへだててもしばしもさんぬべし。ただかなしかりけるは大地震なり。鳥にあらざれば空をもかけりがたく、竜にあらざれば雲にも又のぼりがたし。白河、六波羅、京中にうちうづまれて死ぬる者、いくらといふ数

を知らず。四大種の中に、水火風は常に害をなせども、大地においてはことなる変をなさず、こはいかにしつることぞやとて、上下遣戸、障子をたて、天のなり地のうごくたびごとには、唯今ぞ死ぬるとて、声々に念仏申し、をめきさけぶ事おびたたし。

『平家物語』巻第十二　大地震

こちらには、六勝寺や得長寿院など京の寺の名称がみえ、寺社仏閣の倒壊の様子が具体的に記されている。傍線部は、先に掲出した『方丈記』の記述との類似する部分である。倒壊する音を雷にたとえ、あがる塵を煙りのようだとし、「大地さけて」以下の克明な描写は、表現そのものから『方丈記』に通じている。また、四大種に言及し、大地だけは動じないと思っていたとあるくだりも『方丈記』と似通う。

しかし、異なるのは、この場面の末尾の部分である。『平家物語』の場面は次のように結ばれている。

昔文徳天皇の御宇、斉衡三年三月八日の大地震には、東大寺の仏の御くしを、ふりおとしたりけるとかや。又天慶二年四月五日の大地震には、主上御殿をさッて、常寧殿の前に五丈の幄屋をたてて、まましけるとぞ承る。其は上代の事なれば申すにおよばず。今度の事は、是より後もたぐひあるべしともおぼえず。十善帝王、都を出でさせ給ひて、御身を海底に沈め、大臣公卿大路をわたして、その頸を獄門にかけらる。昔より今に至るまで、怨霊はおそろしき事なれば、世もいかがあらんずらんとて、心ある人の歎きかなしまぬはなかりけり。

前半は『方丈記』の記述にも通じており、文徳天皇の時代の地震にもふれる。斉衡三年三月とあるのは『文徳実録』の同日条に京都の大地震のことが記されるからで、東大寺の仏頭が落ちたと奏上されたのは、前述のとおり、斉衡二年五月二十三日である。『平家物語』はさらに、天慶二年（九三九）の大地震にも言及し、これは『日本紀略』等に天慶元年改元に記される地震であるが、これらは「上代の例」として、今回のことは以後も類例があろうとは思えないとする。なぜなら、『平家物語』はこの大地震を滅亡した平家の怨霊に結びつけてとらえていくからである。それは、この作品が平家一統を語る物語であるこ

とに由来する。自然災害を人為と結びつけてとらえるところが、『方丈記』とは異なる『平家物語』の特徴である。

災害は、人間の力の及ばない自然現象である。『方丈記』はその脅威と忘却する人間をとらえ、『平家物語』は当世の人為に結びつけて祟りと受けとめる。心に重きのある文学作品が記録と違う所以である。

『方丈記』も『平家物語』も自然の脅威をまざまざと伝えると同時に、それに対する人間と、人の世をみつめる。そこに、時代をこえて変わらぬ、自然と人間のあり方の二相を見出すことができる。

二、古代文学にみる「なゐ」

中世にはこのような地震を描いた文学作品があるが、それ以前にさかのぼると現存する文学作品で地震がとりあげられることは多くない。その様相の一端をたどりみておこう。

古代において地震は「なゐ」という語で表され、用語例としては早く『日本書紀』からみられている。

臣の子の　八節の柴垣　下動み　地震が揺り来ば　破れむ
柴垣

『日本書紀』巻第十六武烈天皇（即位前期）[5]

七年の夏四月の乙未の朔にして辛酉に、地動りて舎屋悉くに破たれぬ。則ち四方に令して、地震の神を祭らしむ。

『日本書紀』推古天皇七年四月

武烈天皇紀の例は、影媛をめぐり歌垣の場である海柘榴市で鮪臣の柴垣は地震が来たら崩れてしまうという。これは、「揺り来ば」という仮定表現であり、実際の地震ではない。一方、後者の推古天皇七年四月条は実際に起こった地震の記述で、建物がみな倒壊したため、国中に地震の神を祀らせたことを記している。地震に関する記述はこれのみで、続く文章は別の内容になり、引用した以上には言及されない。『日本書紀』は地震を自然と人という観点からとらえるのではなく、実際の地震を描く後者の例においてもひとつの事実として記すのみである。

平安時代の作品で早い「なゐ」の用例は、『うつほ物語』に確認できる。

ただ初めの下れる師の教へたる調べ一つを、まづかき鳴らしたまへるに、ありつるよりも声の響き高くまさりて、神いと騒がしく閃めきて、地震（なゐ）のやうに土動く。

『うつほ物語』楼上　下

物語終盤に至り、俊蔭の娘がはし風を弾くと雷が鳴り閃き、地震のように揺れた場面である。これは、琴の演奏のすばらしさを表すために「なゐ」が引き合いに出されている例で、現実に起こりうる地震を背景にもつがゆえの比喩表現としてある。

一方、『栄花物語』にみられるのは、実際におこった地震である。

今年いかなるにか大風吹き、なゐなどさへふりて、いとけうとましきことのみあれば、上は若宮の里におはしますことをいとどうしろめたう思しのたまはすれど、……

『栄花物語』巻第二　花山たづぬる中納言

当年は大風や地震があったため、円融帝は誕生まもない第一皇子懐仁親王（一条天皇）が母詮子の里邸で過ごすことを心配するくだりである。懐仁親王誕生は天元三年（九八〇）六月一日、『日本紀略』には同年七月九日午後に「大風暴風雨」とあり、十五日の夜にも大雨が降ったことが記される。そこに地震も起きたと推測される。大風、地震と続く自然の脅威を怖れているのがうかがえる部分である。

また、『古今著聞集』巻第七「陰陽師吉平地震を予知する事」と題して安倍晴明が地震が来ると言ったらすぐ本当に地震が起こった説話もみられるが、平安時代の文学作品では、『方丈記』や『平家物語』のように地震の詳細が描きとられるわけではなく、災害をもたらす自然と人とをみつめての叙述とは異なる。貞観地震のみならず以降の平安時代にも地震は起きているが、地震という自然災害に真正面から向き合って直接の題材とするのではなく、それぞれの作品の展開のなかで、文脈にそってふれられるといった方が妥当である。それは、平安時代の文学作品が宮廷社会に根ざしていることとも関わっていよう。

しかし、自然現象の脅威が平安時代の文学作品にまったく描かれないというわけではない。たとえば、『源氏物語』では須磨巻末に暴風雨が起こり、蟄居する光源氏は明石へ移ることを

余儀なくされる。続く明石巻では都で天変地異があったことも描かれている。物語の世界は自然と深く関わって構築され、光源氏亡き後の物語では自然に囲まれた宇治という地が舞台として選ばれてもいる。

文学作品のなかで人間の力の及ばない自然は強く意識され、だからこそ、奇瑞の描写に地震も引き合いに出される表現がみられるのである。

三、『源氏物語』の六条院 ―自然と時間―

日本の風土のなかで生み出されてきた文学作品は、自然と人間の関わりを大切にして成り立っている。『万葉集』の時代から自然に人の心情が託され、勅撰和歌集の嚆矢である『古今集』は漢籍の類書の影響下にありながら、「自然」を意識的に文学作品に取り込む作品である。四季の部立てが恋の部立てとともに主要な柱を成し、ひとつの季節のなかでも春ならば立春から仲春へ、晩春へというように、季節の推移を追って和歌が配列される。それは恋の部立てにおいてもみられる手法であり、歌集がひとつの世界を構築する。そこには、自然の時間と人の生きる時間の交差がある。また、仮名散文でも日記文学や物語文学で自然描写がなされ、そこに人の心と時間がかかわっている。

自然と人間という観点から平安時代の文学作品をながめたときに、そのあり方を問いかけてくるひとつの作品として『源氏物語』があげられる。ここでは、その一端にふれてみたい。

『源氏物語』本文に、本企画にある「自然」に相当する語は用いられない。そもそも古代において、現代のような人間と対比される「自然」という概念が確立しているわけではない。「自然」は本来漢語であり、『古今集』真名序には「物皆これあるは、自然の理なり」とある。古代の日本語としておのずからの意味となる場合は、「じねん」とされる。[6] 現代において「自然」と呼び表されているものは、文学では山河、天象、四季ならびにその折々の植物、あるいは鳥獣虫魚などであり、それらが五感によってとらえられ、文学の言葉として作品に組み込まれて作品世界を構築するのである。『源氏物語』においても「自然」の用例は「じねん」であり、[7] 現代でいう「自然」として描かれるのは天象、四季の植物、風景などである。それらは個別のテーマごとに研究が重ねられているが、いま、自然と人間という観点から『源氏物語』をみたとき、ひとつ注目される

のは光源氏の栄華の拠点となる邸宅六条院である。

光源氏にはすでに母桐壺更衣から伝領した二条院と澪標巻で造営される二条東院があるが、六条院は四方四季の構造をもつ光源氏最大の邸である。藤原氏の権力者たちによって伝領された実在の東三条殿は南北二町といわれ、六条院はその倍の広さを持ち、自然を取り込んで四つの方角に四町を構え、それぞれに女主人を据えてその象徴する季節を配する趣向である。その造営の様子は、少女巻末尾に描かれる。

未申の町は、中宮の御旧宮なれば、やがておはしますべし。辰巳は、殿のおはすべき町なり。丑寅は、東の院に住みたまふ対の御方、戌亥の町は、明石の御方と思しおきてさせたまへり。もとありける池山をも、便なき所なるをば崩しかへて、水のおもむき、山のおきてをあらためて、さまざまに、御方々の御願ひの心ばへを造らせたまへり。

故六条御息所の邸跡をとりこむ未申（南西）は秋の町で娘の秋好中宮、辰巳（東南）は春の町で光源氏と紫上、養女の明石姫君が住む。丑寅（北東）は夏の町で花散里、戌亥（西北）は冬で明石の君が住む。四つの町は仕切られながら行き来もできる構造であり、それぞれの町はその季節に最高の見所があるように趣向を凝らして造営されている。たとえば、春の町は次のように描かれる。

南の東は山高く、春の花の木、数を尽くして植ゑ、池のさまおもしろくすぐれて、御前近き前栽、五葉、紅梅、桜、藤、山吹、岩躑躅などやうの春のもてあそびをわざとは植ゑで、秋の前栽をばむらむらほのかにまぜたり。

南の東に築山を設け、春に花咲く木を植え、池を造り、春の進行にともなって順次開花するように設定され、それ以外の季節にも見映えがするよう配慮されている。他の三つの町についても、微妙に様子は異なるがそれぞれの季節の趣向が凝らされる。さらに、南側に位置する春と秋の二町は春秋の対比構造となり、実際物語でも春秋優劣論の趣向をとりいれた物語展開となっている。

四つの季節をとりこむ六条院の構造の思想的根拠としては、易教の方位観との関わりをみる説[8]や観無量寿教の影響を見る説[9]、

日本漢文による神仙思想の影響をみる説などがあり、中世の注釈書である四辻善成『河海抄』では、これが源融の邸を模すかとし、『うつほ物語』吹上・上巻にみえる神南種松の邸の影響を指摘する。先行物語を意識しつつ、『源氏物語』の六条院は、四人の女性を通して四季の運行をも支配し得る統括者光源氏の超越性を示す邸としてある。六条院は完成後、さらに「みやびのくさはひ」となる玉鬘を迎え華やぎを増し、めでたい新春の様子が「生ける仏の御国」と表される春の町を中心として、それぞれの町を舞台に四季折々の華麗な諸行事が描かれていく。この非日常的な邸こそ王者光源氏の象徴であり、藤裏葉巻ではここに帝・上皇の行幸を描いて、大団円となる。

しかし、物語はそれのみで終わらない。以後の物語では、この六条院は内実の崩壊した邸となる。若菜下巻に至り、年若い皇女の降嫁を境に六条院は表向きの栄華を保ちつつも秩序が乱れ、紫上を失い、光源氏の翳りを表す場へと変容する。栄華の拠点となりながら崩壊していくのが六条院である。光源氏の子孫たちの世代になると、六条院は長男夕霧を統括者として引き継がれてはいくが、かつてのような華やぎはとどめない。

光源氏ほどの超越的な主人公であっても、自然を統括することはできない。物語の歳月がそれを阻む。自然を傘下におさめ四季をも統括しようとした邸の崩壊は、人間が自然を領有することの破綻にほかならない。物語が描くのは時間のなかにある人間としての光源氏である。物語世界の歳月を生き、御法巻で紫上を喪った光源氏は、幻巻で哀傷の十二ヶ月を生きて物語世界から退場する。四季の運行のなかで生涯を顧る最晩年の光源氏が照らし出される。

『源氏物語』では、のちの文学作品のように自然災害の直接描写はなされない。しかし、物語世界は、自然と人のあり方を問いかけてくる。言葉で紡ぎ出された虚構世界は、自然と人間のあり方を鋭くみつめている。そこには、人の生きる時間が深く関わる。

事実の記録のみならず、書きおかれたさまざまなことばは、現代を生きる人のあゆみを照らし出してくれる。虚構ゆえ伝えられる真実もある。震災から一年を経たいま、時代をこえて生き続けるこれらのことばを謙虚に受けとめたい。

註

（1）『三代実録』には、「廿六日癸未。陸奥国、地大に震動りて、流光昼の如く隠映す。……略……海口は哮吼えて、声雷霆に似、」とあり、津波の様子は「原野も道路も忽て滄溟と為り、」と記されている。本文の引用は『訓読日本三代実録』（臨川書店　一九八六年）による。

（2）作品本文の引用は、原則として新編日本古典文学全集による。それ以外の場合は、その都度記す。

（3）『玉葉』の本文は、高橋貞一『訓読玉葉　第五巻』（高科書店　一九八九年）による。

（4）『百練抄』の本文は、『国史大系』（吉川弘文館）による。

（5）『日本書紀』の訓みは、新編日本古典文学全集による。

（6）『色葉字類抄』には、「自然　シセン　シネン」とある。

（7）『源氏物語』には「自然に」のかたちで全八例。内訳は帚木巻三例、明石巻、行幸巻、若菜下巻、蜻蛉巻、手習巻に各一例ずつある。

（8）渡辺仁史『源氏物語』の六条院について―四季の町の配列―」『中古文学』一九九四年五月。

（9）田中隆昭「仙境としての六条院」『国語と国文学』一九九八年十一月。